

「現場に立って見えること」

国際基督教大学高等学校 3年

渡邊 裕友

私は2018年の2月から、「トビタテ！留学 JAPAN」の支援を受けケニアに短期留学する。南部の町ナニユキで英語教師としてボランティアをする傍ら、ホームステイなどを通じてケニアの人々の暮らしを知ることが留学の目的だ。

「現場を見て、やるべきことの本質を見極めなさい。」治安や疾病のリスクから敬遠されがちなアフリカのケニアを留学先として選んだのは、尊敬する元国連難民高等弁務官の緒方貞子さんのこの言葉があるからだ。私は将来、世界から貧困が生み出す苦しさや寂しさをなくしたいと思っている。そのために、今のうちから多くの「現場」に立ち、世界が直面する問題を肌で感じたい。このことをより強く意識するきっかけとなったのは、2016年パラグアイに1年間の留学をしたことだった。

パラグアイはアルゼンチンやブラジルに囲まれる南米の内陸国だ。山や海に恵まれないことに加えて観光資源が乏しく南米の中でも経済規模は小さい。欧米からの留学生が首都の富裕層家庭にホームステイをする中、私は唯一農村地域への配属を希望した。就労人口の3割近くが農業に従事し、貧困層が4割を超えるパラグアイの現状を自分の目で確かめたかった。農村での生活は想像以上に厳しいものだった。ホームステイ先の家にお湯はなく、洗濯も手洗い、学校には人数分の机さえなかった。一番苦しかったのは食事。朝食を抜いた一日二食で、夕飯が卵2つだけの日もあった。日本の陸上部で走り込み、絞り切ったはずの体はさらに5キロ細くなってしまった。もちろん、嫌なことばかりだったわけではない。決して恵まれない環境の中でもホストファミリーは私を優しく受け入れ、寂しくならないようにといつも大きなハグをしてくれる。日本の母の誕生日には、地球の反対側へ届けと親戚全員でバースデイソングを合唱してくれた。そんな一方で親のいない同級生もたくさんいた。平均賃金の低いパラグアイでは、多くの人々が隣国アルゼンチンへ出稼ぎに行く。残された子どもたちはアルバイトをしながら、一軒家や遠い親戚の家で暮らす。寂しさからか、そうした同級生が非行に走ることも多々あった。そこには、データでは表すことの出来ない喜びがあり、悲しみがある。だから現場に立って本質を見極める。緒方氏の言葉を初めて理解した瞬間だった。

私にとっての「現場」は途上国に限らない。日本へ帰国後、私が行っているチャレンジがもう1つある。それは、「スープの会」という、週に一度新宿駅周辺のホームレスを訪問しお茶やスープを配る団体での活動だ。一番の目的は物質支援ではなく、お話を聞くこと。都内で暮らすホームレスの方の多くは日雇いなどで生活をつなぎ、食べ物には困らないという人も多い。また、支援を受けて家での生活を始めても、かえって周囲とのつながりが絶たれてしまい、コミュニティーの中で暮らす路上生活に自ら戻る人がいることも知った。直接お話を聞いたからこそ見えてきた

課題だった。現場に立ってこそ問題の本質が見えてくる。だから私は、これからも多くの人との対話を通じて、貧困が生み出す問題と向き合っていきたい。

国際人やグローバル人材といった言葉を日本でもよく耳にする。確かに、複数の言語を操る人は増えたかもしれない。しかし、それ以前に私たちは、自分たちの周りの問題に対して真摯に向き合うことが出来ているだろうか。「良き日本人は良き国際人となる」という言葉があるように、自分たち自身の事や問題を理解して初めて国や言葉を超えた人々と共に生きることが出来るのだと私は思う。地球規模で考え行動しながらも、身近なものにも目を向け、耳を傾ける。それが私の考える世界の人々と共に生きるための最初の一步だ。